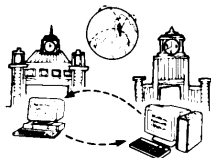


巻頭言



自己変革を期待して

真名 垣 昌 夫[†]



ギガビットクラスのデバイス／通信／情報の能力に支えられたマルチメディア時代に突入した。パソコンの'95年度出荷は1500万台を超えた。不特定多数の人を対象としたインターネットも世界規模で3000万ユーザといわれ専門家から一般市民まで幅広く急激な勢いで普及拡大している。個人の趣味の会からオンライン商取引などのインターネットビジネスに見られるような具体的な情報発信／情報提供／情報編集へ目に向けたサービスやその基盤ソフト、情報端末が盛んに開発され将来の情報化社会の姿を浮き彫りにした。この米国発情報インフラの出現は、情報の大爆発をおこし、情報の受発信を加速して人と人とのコミュニケーションの空間を拡大し、円滑にするとともに新鮮な情報／精選された情報の重要性、情報の価値化の重要性を再認識させている。

とくに、情報処理関連技術は速く激しく進展し、価値ある情報としてのその寿命はますます短くなる一方である。また、その技術領域は通信とコンピュータ技術が一体化するとともに、従来の学問技術の枠内にとどまらずアートやエンタテイメントに見られるように情報処理技術を利用面から捕らえた新たな可能性追求も活発であり、分野を超えた技術交流により新たな技術分野を生み出している。

情報技術／流通機構の変化をもたらしたデジタル化の波、ボーダレス化の波は、学会の役目と現在の活動を改めて見直すきっかけとなっている。電子化に目を向けると、インターネット先進国である米国ではGIIにからめて議会図書館や大学などを中心に電子図書館等の電子化が推し進められている。また、ACMではマルチメディア時代の学会のあり方として新たな学会機能、会員サービス、著作権の扱いなどを討議した電子出版プランを策定している。本学会も昨年ホームペー

ジを開き情報発信の第一歩を踏み出し、また論文誌のTeX化など徐々に電子化の方向に向かっていくが、おしなべて国内の各学会はこれからというところである。

電子化を推し進める上で情報リテラシの強者と弱者の問題、知的所有権問題、倫理問題、学会財源問題、さらには情報流通インフラとしての学術情報センターなどの他機関との関係等々の多くの課題が存在する。しかし、山積する課題の解決を待つのではなく、むしろ会員相互の顔が見えるという学会活動の良さに加え、今までにない新鮮な情報による双方向の対話性やコミュニティ形成の容易さなど環境がもたらす長所を活かし前に進むことが重要である。たとえば、学会誌、研究報告、論文誌などのデータベース整備に始まる1次情報の会員サービス、学会間をまたがる学術情報サービスなどの従来活動の延長に加え、フリーソフト流通の場の提供など新たな情報サービス、会員間／会員外とのコミュニティの場の提供など多くのことが考えられる。

また、学会は社会的にも技術的にも国際的にもオープンであらねばならない。電子化は学術情報や研究活動のオープン化につながり、他学会との連携や異なる技術分野学会との技術交流、さらには会員外との交流の場を容易に築くことができる。バーチャルな研究会や学会を積極的に運営することも未知の技術領域を開拓し活動を活性化する上での1つの方策である。

ここ1年は学問技術の普及振興や会員へのサービスなどの利用者の視点からも考察し、アイデアと知恵の創出を行い、そして自らの意志で21世紀型学会を模索しつつ、勇気を持って実行してゆくことにより変貌してゆかねばならない。

(平成8年7月5日)

[†] 本会出版電子化担当理事 日本電気(株)関西C&C研究所